

---

# これでも元セイバーでした.....

風流

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

これでも元セイバーでした……

### 【Nコード】

N8359Y

### 【作者名】

風流

### 【あらすじ】

ある日、アニ。イトで約束された勝利の剣のレプリカを衝動買いしてしまった俺こと《神下悠》は何が起こったのか意識が無くなった。そして、目を開けるとそこには真っ黒なコートを着たオッサンと銀髪の超絶美女。さらに隣には……。

そして、その十年後……第五次聖杯戦争にて一体の漆黒の化物がアインツベルンのマスターによって召喚された。  
十年の時を超えて、その因縁を断ち切るために……。

## 第一話 再会（前書き）

アニメ見て、原作読んだら書きたくなってしまった……駄文ですが  
生暖かく見守ってくださいと嬉しいです！！

## 第一話 再会

吹き荒れる吹雪に覆われる大地。

針葉樹林の森に囲まれたその場所には古城が存在した。

このご時世に城って……（笑）と鼻で笑われるはずのそれは、しかし実際に見た者に一種の畏怖すら与えるほどの豪華なオーラを放っていた。

そもそも、こんな常冬の氷点下を下回る大地に住み着く人間は普通ではないだろう。

そう普通ではない――

――アインツベルン家。千年もの間、叶わぬ悲願を成就するためにその場所に住み続ける魔術師――いや、数十年ですら劣化するであろう集団の意志を千年という長い時の中で一度も揺らぎなく突き進んできた彼らはすでに怪物と呼ぶに相応しいだろう。

そんな魔の領域ですら突破した者達は長い時の中でその願い叶えるためにある儀式を行ってきた。

### ――聖杯戦争。――

万物の願いを叶える願望機『聖杯』を手に入れるための争い。しかし、この『聖杯』はかのキリストが最後の晩餐にて弟子達に自分の血としてワインを注ぎ、振る舞った聖杯ではない。

二百年前、アインツベルン、マキリ、遠坂の三家がそれぞれの思惑から協力したことで始まった、失われた第三魔法『魂の物質化』<sup>〈ウンス・フイル</sup>『天の杯』の再現の為に用意された贖物の聖杯である。

それを7人のマスターがサーヴァントを召喚し、覇権を競い合い、手に入れるのだ。

そして、六十年周期で行われてきた聖杯戦争は五回目の戦い兆しを見せ始めていた。

＋＋＋＋＋

外界は凍てつく吹雪。

礼拝堂と思しき部屋を照らすは蠟燭の光のみ。そんな中に1人の少女が居た。白銀の髪は薄暗い部屋の中でも悠然と輝き、双方の紅い瞳はルビーのようだが、しかし、何処かドス黒い狂気を孕んでいた。幼い身体を跪かせて雪のように白い肌をした手を胸に当てている。そして、その手の甲には赤い模様が刻まれていた。

そんな少女の前には水銀によって描かれた魔法陣??その中心には雪の結晶を模した黒い何かが置かれていた。

少女の透き通るような美しい声が礼拝堂に木霊する。

「告げる??」

それに呼応するかのように右手の様子が輝き始める。魔力の奔流が魔法陣を中心に吹き荒れる中、少女は狂気の呪文を紡ぐ。

「???されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者??」

自身の魔術回路が蠕動する悪寒と苦痛に苛まれながらも決して詠唱を止めようとしない。

「???抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ?????!」

その瞬間、目も開けられない程の閃光が部屋を呑み込んだ。流石の少女もこの光には耐えられず目を覆いざるを得なかった。どれ程の時間が過ぎたかわからない。

数秒かもしれないし、数分、数十分かもしれない……少女は恐る恐

るといった感じで目を開ける。

この世ならざる場所との繋がりである魔法陣……そこから溢れ出た  
残光の中に確かにソレはいた。

漆黒の影にその身を隠し、双方の瞳からは少女よりも禍々しい紅い  
光を放つ化物が??

「  
■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ? ? ? ? ? ? ツ ! !」

その慟哭はアインツベルンの古城だけではなく、吹雪が吹き荒れる  
大地までを揺るがした。

## 第一話 再会（後書き）

プロローグを兼ねた第五次の回です。

バーサーカーはヘラクレスじゃありません。

小説の題名からして誰だかわかっちゃいますよね。

ちなみに、詠唱って魔術師個人によって違うと何かで読んだ記憶があるのですが、狂化させる際のやつはどうなんでしょう？

次回は第四次の話です。ややこしくて申し訳ないです……それでも面白いと思って頂けるなら幸いです。

感想など書いて頂けると嬉しいです。

## Memory-1 (前書き)

小説書くのは素人なので駄文かもしれませんが、よろしく願います。

設定重視という訳じゃないのであしからず。

## Memory - 1

寒い……ものすごく寒いんですけど……。

さっきまでクソ熱い街中をバカでかい箱を肩に背負って歩いてたのに何で？

薄暗い部屋——これは礼拝堂か？みたいな場所に突っ立っていた。しかも、目の前には黒いコートを着た目が死んでる胡散臭いオッサンとその隣にはなんか銀髪赤眼のスゲー美人さんがいるんだけど……二人啞然と口を開けて俺を見ていた。正確に言うと俺とその隣を。俺はあまりの寒さで固まった首をギギギと横に向ける。

今度は俺がバカみたいに口を開ける番だった。

「うわぁ……セイバーだ」

どうか、こんな阿呆な台詞しか出てこない俺を許してほしい。しかし、俺と同じ状況に立てば十人中十人が同じ反応をするだろう。

見ただけでわかる後ろで結われたサラッサラの金色に輝く髪。その下の顔は非常に整った少女のもの。

華奢な身体を包み青いドレスで包み、更にその上に銀色の甲冑を身に着けている。

俺の横に居たのはブリテンの王、アーサー・ペンドラゴンその人だった。

よく見れば前方の二人もよく知っている顔だ。

「一体何が……」

彼女がそう呟いた。

姿が美しければ、声も美しいと言ったところだろう。

彼女はその翡翠色の瞳で俺の姿を捉えており、俺と同じく何が起きているのか、わからないといった様子で啞然とし、眉根を寄せて訝しげにしていた。彼女の驚愕の理由は全く違うのだろうか……。いやいや、十中八九この中で一番混乱しているのは俺ですから。

何で、なんで、ナンデ？

意味が分からないッ！！つい数分前まで俺はアニ。イトで少し高い買い物をしてしまった、何処にでもいるただの一般人で少しオタクな大学生ですよ？

なのに何だこれは？二次元の世界に放り込まれた？

しかも、よりもよって歩けば死亡フラグが乱立するFateって……。

んなテンプレいらねえんだよ！！

夢か？夢なのか？

夢なら早く覚めてくれ。目を覚ましたら病院のベッドの上で、医者に熱中症で倒れたんですよアナタ。覚えてます？って言われれば、どれ程嬉しいことが。

という訳で俺は腕を大きく振り上げ――

――自分の顔面をこれでもかと言うほど思い切り殴った。

+++++

都会は嫌いだ。

俺はド田舎とはいかないまでも田舎と呼ばれるであろう場所に住んでいた。そして、ほぼ何もない場所で生活してきた俺にとって都会とは憧れだった。

だから、大学への進学への機に上京することは必然だったのかもしれない。

だが、実際に都会に出て待ち受けていたのは現実と言う名のカルチャーショック。何もかもが——全てが違っていた。

そんな中に一人で飛び込んだのだ。友人が一緒だったならば、まだマシだったのかも知れないのだが、生憎と仲の良い友人達は皆、地元の大学へと進学または就職し、まともに話したことさえない連中ばかりが俺と同様に都会に出てくるという言ったお馴染みのパターンだ。

そして、それは大学に入ってから変わらなかった。

誰かに上手く話しかけることすらできず、時間が経つにつれて仲の良いグループが出来上がることで、更にその輪に入って行き難くなるという悪循環。

見知らぬ土地で何時でも一人という状況において精神がもつはずもなく。俺が逃げ込んだのは現実逃避と言う名の趣味である。

四六時中アニメやライトノベルを見て、気を紛らわす毎日。

典型的なダメ人間であることは自覚している。

こんな俺を見て人はまずは自分を変えろというのかもしれない。しかし、自分を変える勇気があれば、今俺はこんな事になってはいない。自分をどう変えていいのかすらわからない俺にどうしろと言うのか……。

そんな毎日を送っていく中でふと思うことがある。

日々を惰性で生きているこの命に意味などあるのか？

毎日を充実させ、謳歌している人間が聞いたらおそらく鼻で嗤われるだろう。アニメやライトノベルの読み過ぎだと馬鹿にされるだろう。

確かに俺も厨二病、乙と思う。

しかし、どれだけ自嘲してもこの思いが頭から離れてくれることがなかった。

そして、最近になってそれがどんどん強くなってくるのだ——

「——様……お客様」

突然の後方からの声に俺はハツとする。

一人の店員が手に値札を持って立っていた。どうやら邪魔だったみたいだ。

「ああつ……すみません」

俺は脇に身体を退かし道を開ける。

店員は軽く頭を下げ、俺の前を通っていき、ある商品に値札を追加で貼り付けていた。

その商品とは——

【原寸大！！Fateシリーズに登場するセイバーが握る約束され  
カリバーた勝利の剣を忠実に再現！！価格100000円】  
エクス

そして先程、追加で貼られた値札には在庫現品限り40%オフと書かれていた。

「……………」

どうしてなのかわからない、それでも俺はこれから目を離せなかった。確かにとても精巧に作られているし、何よりカッコいい。だけど、そんな事とは関係ないもつと根本的なところで俺は何故か惹きつけられていた。

二十歳にもなつてアニメに出てくる馬鹿みたいに値が張る模造剣と睨めっこしていると母親が聞いたら多分泣くだろ。だが、すでにこれを買った場合の生活費の計算までしている俺がいた。

そして、気が付くと店員に声をかけていた。

「——これください」

「暑い……クソッ」

俺は長細い、かつ馬鹿デカイ箱を肩に背負いながら街中を歩く。  
これが衝動買いというやつか……恐ろしいな、なんて思いながら  
駅へと向かう俺。

真夏の太陽に照り返され、カラカラに乾燥したアスファルトにポ  
タリと汗が落ちる。

この偽・約束された勝利の剣、模造剣のクセして無駄に重いのだ。  
エクスカリバー  
まさか、サイズだけじゃなくて重さも公式設定と同じじゃないだろ  
うな……そんな設定あるかどうかは知らんが。

「は、なんでこうなっちゃったのかなあ」

衝動買いの件も含めて、自分のここ最近の状況に思わず溜息を漏  
らす。

こんな日々が続くのかと思うと憂鬱になる。

もういつその事——

——キャアアアアアアアアアアッ！！

「は？」

いきなり街のど真ん中で絶叫が上がったのだ。

何やら騒がしいし、何人かがこっちに走って来る。

「ッ！？なんだよ……これ」

見えたのは赤い斑点。

赤、赤、赤、赤、赤の一色。

そして、それは一人の女性から零れ落ちたものだった。

すでに息はないのか、グッタリとしておりピクリとも動かない。  
屋外にも関わらず鉄の錆びた匂いが充満している。

あまりに強いその匂いに胸がムカムカしてどうしようもない。  
なぜ、こんな状況になったのか俺はすぐに理解することになる。

「ざまあ見るッ！！お前が悪いんだよ、クソ女！！」

そう言いながら中年の男が刃物を振り回していた。

目が濁っていてまともに焦点すら合っていない。唾を飛ばしながら奇声を上げていた。

俺もすぐさま逃げようとした。

あんなのは手に負いかねる。警察に任せるのが一番だ。

しかし、回れ右をしようとしたところで俺は見てしまった。一人の若い少女が男の近くにいろのを――。

男はそれ気付き近づいていく。

俺は駆け出す。

何度も腹部を襲う激痛に次ぐ激痛。

視界の大部分が赤く染まりながらも手に持ったのは偽・<sup>エクス</sup>約束された勝利の剣。<sup>カリバー</sup>

それを男の脳天めがけて振り下ろしたところで――

+++++

「ッ――！？」

俺は目を覚ました。

先ほどと同じような薄暗い部屋。しかし、違うのは暖炉に火が付いており部屋はとても暖かいことと天蓋が付いたベットがあり、その上に俺が横になっているということか。

さっきのは夢なのか？自分が刺されている夢なんて趣味が悪いことこの上ないのだが。

それでもあの異物が肉を突き破って入ってくる感触はあまりにもリアルすぎた。

「目は覚めたかしら？いきなり自分の顔を殴りだすんだもの、驚いちゃったわ」

そして、俺の前に居るのはアイリスフィール・フォン・アインツベルン。その隣にはドレス姿のセイバー。目覚めには悪くない――  
――むしろ、最高だと言えるだろうが、美女二人の表情は硬かった。

「あなたには聞きたいことが山ほどあるの」

「はあ……」

緊張のし過ぎで気の抜けた返事しか出来ない俺。

しかし、目の前の彼女は言葉を続ける。

「セイバーと同時に召喚されてきた、あなたは誰なの？ 召喚自体には何も問題は無かったはずよ。なのにどうして……」

アイリスフィールは困惑しながら聞いてくる。

そんなもの俺にわかるわけないだろうが。こっちはただの一般人で大学生だっつーの。

「神下悠としか答えようがないです。ここに来た意味は残念ながら……」

そう、言っただけ信じてもらえるようなことではない。俺自身ですら現実（何をもつて現実かはわからないが……）として認められないのだ。

「カミシタ……ユウ……聞いたことがないわ」

彼女は唇に指を当て考え込んでいる。そして視線をセイバーに移す。

だが、セイバーもわからないと言った風に首を横に振る。

そして、彼女は次の瞬間、爆弾発言をする。

「でも間違いないのはあなたが私のサーヴァントってことよね」

「は？」

微笑みながらアイリスフィールは俺に手の甲を差し出した。

——そこにはしっかりと赤く輝く令呪が刻まれていた。



## Memory - 1 (後書き)

3000文字越えぐらいが僕の限界のようです。

まさかのアイリスファイルのサーヴァント……切嗣だったらすぐにセイバーに主人公のこと殺させそうだな。

彼のクラスは本当のところ不明ですが、彼の宝具（笑）からしてセイバークラスが妥当になっちゃうんですね。

原作かなり無視しちゃってますが大目に見えていただけると嬉しいですよ。

なんか、シリアスなのかギャグなのかよくわからなくなってますが基本的にはシリアスです。主人公、まだ自分の立ち位置とかちゃんと理解してない平和ボケした一般人だしね。

あと、Memory - 〇が第四次の回で、第〇〇話が第五次の回です。

次回はどっちにしようか……つか、今回も全然進まなかったし、同時進行はキツイかな、なんて思ってます。

宜しければまた読んでください。

## Memory-2 (前書き)

よろしく願います。

## Memory - 2

俺はセイバーと共に窓の外を眺めていた。

ここに来て以来、毎日、外は吹雪であり、アインツベルンの人間——いや、ホムンクルス達はどうやって食料を調達しているんだろう、なんて阿呆な事を考えていたのだが、その吹雪も久方ぶりに止んでいた。

いつもは曇天によって覆い隠されている太陽も、その日だけはさ  
んさんと輝いていた。

そして、積りに積もった雪に太陽の光が反射し、一種の幻想的な世界が生み出される中、小さな雪の妖精が笑顔で戯れていた。（以前の俺は断じてこんなロマンチストじゃない。この城に住み続けている所為か、最近どうも可笑しい思考をしてしまう）

要するにイリヤスフィールが父親である切嗣と共に外で遊んでいるのだ。

切嗣に肩車をされ、キャツキヤと嬉しそうに声を上げてはしゃぐイリヤ。その様子は何処にでもいる親子のようでも微笑ましいアニメで見たなこれ、なんていう無粋な考えも吹き飛んでしまう。

ふと、俺はその風景から目を逸らし、隣にいるセイバーをチラリと見る。

その顔には困惑や驚愕と言ったものがありありと浮かんでいた。

眉根を寄せ、硬い表情でイリヤと切嗣の様子を見つめている。

うん、そりゃ驚くだろうな。俺も切嗣とセイバーの様子を横で見  
ていたが、それはもう逆に笑いが込み上げるほどに酷いものだった。  
無視無視無視無視、無視の連続。切嗣は完璧にセイバーを空気とし  
て扱っていた。切嗣さん、マジばねえ。まあ、俺も同じような反応  
をされているがセイバーほどじゃない。

そんな男が笑顔で娘と遊んでいるのだ。それは驚いても仕方がな  
い。

「ユウ、私の顔に何かついていませんか？人の顔をジロジロと見るのは無礼だ」

「いや、失礼した。あの男が娘と遊んでいるのがそんなに意外か、セイバー？」

俺の口調が変なのは許してほしい。ここに来てからセイバーと初めて話した時にその軽薄な口調はなんだ、と彼女に怒られたのだ。だから、仕方なく紳士（笑）っぽい口調で話すことにしたのだ。今思えば、あの騎士王を相手にサインくださいと強請った俺は相当の馬鹿だ。

「いえ、ただ私のマスターは、もっと冷酷な人物という印象があったので……」

確かに……俺もそのギャップには驚いたけどさ。

切嗣がどういふ男かも、俺はもうアニメと原作で知ってはいる。だが、テレビの向こう、活字では表せない、そのリアルさに本当に驚いた。おそらく、これからそんな事が四六時中起こるのだろう。

「まあ、それは無理もないわよね」

背後から声が聞こえてきた。

振り向くとそこにはアイリスフィールが立っていた。

「——マスター……」

さて、そろそろ俺がここに来てしばらく立つが、どういうやり取りがあつて今があるのかを詳しく話していこうか。

+++++

「間違いないのはあなたが私のサーヴァントってことよね」

「……………はい？」

俺は耳が悪くなってしまったんだろうか。今、何かとてつもない言葉がアイリスフィールから飛び出てきたように聞こえたが。……どうか、聞き間違い、あるいは幻聴であってくれ。

「だから、あなたは私のサーヴァントとして召喚されたのよ」

聞き間違いでも幻聴でもなかった。

「ふ……………」

「ふ？」

「不幸だああああああああああああああああッ！！」

城中に響き渡るであろう俺の絶叫。アイリスフィールは俺の大声にビクリとし、あのセイバーさえ、何事かと目を見開いていた。

畜生ッ！！俺の神はもう死んだ！！テメエなんざ雷に打たれて死ぬバーカ。

なんだってんだ、Fateの世界に放り込まれた拳句に何？サーヴァント？馬鹿じゃねえの！？

もう死亡フラグどころじゃねえよ。死亡<sup>デッド</sup>コースター一直線に突っ

走ってんじゃねえか！！

こっちはただの一般人なんだよ！！宝具をバンバン一斉放出したり、馬鹿でかい海魔を召喚したり、固有結界を展開して軍勢で敵を一掃したりなんざできないんだよ！！

「ッ！！ハアハア？？？？」

盛大に叫んだため、息切れを起こした俺は必死になって酸素を求める。

「お、落ち着いたかしら？」

落ち着けるか！！もう胃に穴が開きそうだよ！！無理無理無理無理ッ、絶対に無理だつてッ！！

「もしかして、あなた自分がどんな状況にいるか理解してないの？」

俺の反応を見て怪訝そうにするアイリスフィール。

まさか、召喚したサーヴァント自身がサーヴァントだと言う事を理解していないなんて程、間抜けな話があるわけがない。

クソ、もう薄情しちまうか？

——という訳で俺はあっさりと自分自身の事を全て話した。魔術も魔法も存在しない世界の事を、そこではただの一般人で学生だったと言う事を、そして気が付けば、ここに召喚されていたと言う事を。しかし、この世界が創作の産物だと言う事は伏せておいた。これを言うのはまだ早すぎるし、この人達にどのような影響を与えるかわかったものじゃない。それに、これから先の戦いで何よりの切り札になる。

アレ？俺なんで聖杯戦争に参加すること前提で考えてんだ？

俺の話を聞いた二人は開いた口が塞がらないといった感じで啞然としていた。何よりも俺が英霊じゃない事が一番の驚きだったらしい。

そもそも聖杯によって召喚されるサーヴァントとは英霊の事であり、神話や伝説の中でなした功績が信仰を生み、その信仰をもって精霊の領域まで押し上げた人間サイドの守護者のことだ。

俺なんかが、そんな大層なもんになれるわけがない。つか、一億円やるからなれって言われてもなりたくもねえ。

だが、いくら否定したところで俺はサーヴァントらしい。アイリスフィールの手の甲にしっかりと刻み込まれている令呪がそれを証明している。

じゃあ、何か？俺は八体目のサーヴァントってことか？マジかよおい、この時点で原作当てにできんのか心配だ。

「じゃあ、あなたは英霊でもない、ただの人間ってこと？」

「残念ながらそう言うことです。それに、どうやら聖杯戦争についての知識も俺にはあるみたいですし……これが聖杯から与えられる情報みたいですね」

我ながら大嘔吐きだ。こんな都合の良い話があるわけがない。

「言われてみればそうよね。あなたはサーヴァントという自覚がないだけで、聖杯戦争の内容は理解しているみたいだし」

見事に俺の嘘を信じたよ……大丈夫か？アインツベルン。

そんな事を考えていると正面の扉が勢いよく開き、ある男が入ってきた。

——衛宮切嗣。

アレ？これ、いきなり死亡フラグ立ったんじゃない？

言っておくがこの世界に召喚されたからと言って俺の身体には何の変化も起きていない、と思う。おそらく、脳天に銃弾を食らえば、脳漿を辺り一面に撒き散らせながら即死するだろう。

「話は全て聞かせてもらったよ——君の話は興味深いが、とてもじゃないが信じられる内容じゃない」

それはそうだろう。異世界（？）から召喚されたサーヴァントなんて馬鹿な話あるわけがない。しかし、切嗣は言葉を続ける。

「だが、当主殿とも話し合った結果、君にはそこにいるセイバーと共にアイリの護衛についてもらう事になった」

切嗣はかなり不本意そうに言った。おそらくはアハト翁が無理やり決定したんだろう。爺さんも必死だよな……。自分で言うのもないけど、俺が切嗣ならこんなイレギュラーなんかさっさと殺すね。

「話はそれだけだ。君もサーヴァントの端くれなら自分のマスターぐらいは守って見せる」

一方的に言って出て行ってしまった。

俺はあまりの事に呆然としてしまう。しかし、それと同時に言いようもない高揚感が込み上げてくるのを感じる。

——毎日を惰性で生きている命に意味などあるのか？

あの言葉と共に訪れる言いようもない空虚な気持ち。

ここではそれが解消できるかもしれない。生きていることが実感できるかもしれない。俺はそんな興奮に酔いしれた。

「ごめんなさいね。彼、本当は優しい人なのよ？」

「いえ、構いませんよ。俺みたいな得体の知れない奴を迎えてくれるんですから」

彼女は俺の言葉にホツとしたような顔をする。セイバーはまだ俺を胡散臭そうに見ているが……。

そして、俺はお決まりの台詞を口にする。

「敢えて問おう。あなたが私のマスターか？」

我ながら何ていう口調だ、なんて思いつつ俺はキメ顔でそう言った。後悔はしていない。

「ええ、私があなたのマスター。アイリスフィール・フォン・アインツベルンよ」

恭しく、まるで貴婦人のように（実際にそうなのだが）答えるアイリスフィール。

「了解した。これで契約はなされた。これからよろしく頼むアイリスフィール」

+++++

つてな、具合だ。

まあ、一般人の俺が英霊の中で戦うのは不可能——肉片すら残ら

ずに死ぬだろうが。それでも足掻けるところまで足掻くつもりだ。

俺は俺の為に聖杯戦争に参加する。

セイバーとアイリスフィールとでお茶会をしている中で改めて決意をする俺であった。

「締まらないなあ……」

## Memory-2 (後書き)

果たして彼は本当に英霊ではないのだろうか？

可能性としてはいくつもありますよね。

それにしても今回は走り過ぎた感が否めない。特に切嗣との会話…

…もしかしたら、編集し直すかも……

さて、彼の宝具を何にしようか悩んでいます。一つはもう決めてあるのですが、あと二つぐらい欲しいです。

何かアイデアがある人は送ってもらえると参考にできてうれしいです。

感想等もいくらでも受け付けますが、あまり強い批判を受けると泣きます。

では次回もよろしく願いします。

## ステータス（前書き）

一応作ってみました。おいおい、コレはねえだろうというものはご指摘ください。

あくまで現段階のものでですので悪しからず。

あと、宝具のアイデアを送ってくださった皆様、本当にありがとうございます。

まだまだ募集いたしますので宜しければ送っていただけると嬉しいです。ネタでもマジでも大歓迎です。

あと、かなり見辛いかもしれません。申し訳ないです。

## ステータス

### 《ステータス》

【クラス】 ????

【マスター】 アイリスフィール・フォン・アインツベルン

【真名】 カミシタ・ユウ

【性別】 男性

【身長】 171cm

【体重】 69kg

【属性】 秩序・善

【筋力】 E 【耐久】 E

【敏捷】 E 【魔力】 E

【幸運】 E 【宝具】 ?

### 【クラス特性】

対魔力：E+++

有って無いようなもの。いわばオマケ、気休め。

騎乗：C+

自動四輪と自動二輪、原動機付き自転車に限る。上京する前に田舎で免許を取った。生まれもっての才能か運転技術は高い。

### 【保有スキル】

カリスマ：D

ザコでも一応、主人公。その言葉は人々をある程度、惹きつける。

心眼（偽）：A

彼自身の原作知識によるもの。断じて厳しい修行などで得たものではない。

挽回：C++

戦闘時に限り、稀に幸運のランクがC++に上昇する。

### 【宝具】

?????

### 【詳細】

元一般人であり、オタクな大学生。

性格の所為か軽度のコミュニケーション障害であり、それは上京した時に顕著に表れた。オタクの道に走ったのも現実逃避が目的である。

惰性で生きている毎日に嫌気がさしたある日、とある事件に巻き込まれ、その結果どういう訳かセイバークラスのサーヴァントと共に召喚された。

クラス不明のサーヴァントではあるが、かなり劣るもののセイバークラスのクラス特性を保有する。

ただの人間であるが、これはあくまで本人の言い分である。

どのような宝具を所持しているか、本人にもわからない（本人は所持していないと思っている）。

……………酷過ぎる。



## ステータス（後書き）

こんなものかな？

意見を送って下さった読者様ありがとうございます。

皆様のご指摘次第で追加・削除等の編集をしていこうと考えています。

## 第二話

### 半月（前書き）

感想たくさんありがとうございます。

遅くなるかも知れませんが少しずつでも返信していこうと思っています。

アイデアもとても参考になって読んでいて楽しいです。ありがとうございます！！

今回は少し短文ですが、（しかも、いつもよりグロい）読んで頂けたら嬉しいです。

## 第二話

## 半月

冬木の夜の空。

雲一つ無く、星はその本来の輝きを余すところなく放っていた。

そして、そんな中で悠然と君臨するは巨大な半月。

降り注ぐ月光がアインツベルンの森を照らし、その中を雪の妖精が闊歩する。淡い光の中を歩くその姿はとても儚く、幻想的であった。

「いい加減に出て来たら？ 私も何時までもそうされてたら、つまらないわ」

クスリと笑う、その姿は年相応の少女のものだった。

そして、その問いに応えるかのように現れたのは三つの影。月の明かりに照らされながらも、その姿はよく見る事ができない。

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルンで間違いないか？」

三つの影の中から低い、それでいて眩くような声がそんな事を聞く。

「ええ、そうよ。私がイリヤスフィール。初めまして」

そう言つて、彼女は恭しく挨拶をする。招待のされていない客人であつても、優雅に歓迎する事は変わらない。

「クククツ、まさか、こんなガキがアインツベルンのマスターだったのか。そろそろアインツベルンも終わりじゃねえのか？」

先程とは別の声が馬鹿にするかの様に喉を鳴らして笑う。

「相手が子供だろうが関係ない。私達は依頼された通りに仕事をこなすだけです」

落ち着いた、または冷たい印象を相手に与える女性の声。

「その通りだ。幸いサーヴァントらしき姿は見当たらない。さつさと片付けるぞ」

「へいへい。つたく、ガキを殺すなんざ胸糞悪いなあ」

そう言いながらも、その声は楽しみでしやうがないと言った感じだ。彼等は殺しに特化した魔術師だ。元の魔術師としての本分すら当の昔に忘れた彼等にあるのは、金の為、己の快樂の為である。

おそらく、彼等を雇ったのは聖杯戦争に参加する別のマスターであろう。戦争が始まる前に敵を叩くのは？？特に御三家の一つであるアインツベルンを叩くのは当然というものだ。もしかすると、間桐や遠坂のマスターのところにも送り込まれているのかも知れない。

「悪く思つな、アインツベルンの少女よ」

その言葉と共に放たれるは紅蓮の炎。魔力を通すだけで魔術を起動する一工程にしては威力が高すぎる、それがイリヤスフィールを襲う。

だが？？。

その炎は彼女に届く事はなかった。

数cm、あと数cmのところではイリヤスフィールを焦がす筈だったそれは突如現れた漆黒の壁によって阻まれる。

「ッ！？やはり、ガキでもアインツベルンの魔術師か！！」

三つの影から同時に呪いが放たれる。先程の一工程の魔術とは比べ物にならないほど魔術が再びイリヤスフィールへと向かう。そして、凄まじい爆音と共に舞う土煙がその姿を隠す。

「殺ったか……」

確認へ向おうと一つの影が歩き出したが？？

「つままないわ、本当につまらない」

「ッ！？……ギヤアアアアアアアアアッ？？」

肉を抉る様な生々しい音と少し遅れて叫ばれる断絶間の悲鳴。

そして、ドサリと倒れる影。

軽い視覚障害の魔術が解かれていき、現れたのは黒いスーツに身を包んだ金髪の若い男だった。そして、その身体を中心？？心臓がある筈の部位にポツカリとした穴が開けられており、口からはゴボゴボと逆流した真っ赤な液体が溢れ出ていた。

舞っている土煙が烈風によって薙ぎ払われる。そして中から現れたのは傷どころか、汚れ一つない白銀の妖精。

無邪気な笑顔をその顔に刻み、紅い瞳は歪んだ狂気を灯す。

「貴様ッ！！よくも？？！！」

「よせッ！！」

低い制止の声が響くが叫ばれる女の声と共に影が走り出す。それに対してイリヤスフィールはまるで子供が無邪気に笑いながらアリの踏み潰すかの様に死刑宣告を告げる？？。

「ふふっ?? 殺っちゃえ、バーサーカー」

瞬間、漆黒の魔力がアインツベルンの森に吹き荒れる。

月の光ですら覆い隠し、黒く黒く黒く、どこまでも黒く染め上げる。

「■■■■■■■■????ツ!!」

響き渡る慟哭。

その声は大気を震わし、木々を軋ませる。そして、何よりも二人の魔術師を震え上がらせた。

「■■■■■■■■????ツ!!」

幾人と人を殺してきた彼等はその分、怨嗟の声も自身に向けられる。だが、今放たれているソレは彼等が聞いてきた声など子守歌に聞こえる程、比べ物にならなかった。

悲観、絶望、殺意、怨嗟、それ等の凄まじい負の感情全てが内包されている声がまさに自分達に向けられている。

「ひッ、ああ……ああああッ!!」

先程走り出した影が心が壊れてしまったか、いきなり倒れ、疼くまゐる。

その所為か、殺された男と同じように認識阻害の魔術が消えていく。現れたのはやはり、スーツ姿で切れ目が特徴的な黒髪の女だった。

「嫌、嫌よ。やめてええええええ!!」

耳を押さえて悲鳴を上げる女。

だが、尚も聞こえてくるその怨嗟の叫びについに??。

グシュ……

女の耳の穴から流れる赤い液体。

それは彼女は自ら指を突き込み、鼓膜を破った音だった。

その様子を見て、眉一つ動かさないイリヤスフィールの隣にソレは何時の間にか居た。

漆黒の狂気をその身に纏い、輝く紅い眼光は何も見てはいない。いや、見ているものがあるとすれば、それは過去の??。

「バーサーカー……」

愛おしそうにその身体を撫でるイリヤスフィール。その顔に恐れと言った感情は皆無だった。

そして、その声に応えるかの様にゆっくりと動きだして疼くまる女へと向かうバーサーカー。

「いあ、ああ……」

女はその姿を目にしても、もはや動く事ができなかった。だらしく口から涎を垂れ流し、股からはアンモニア臭のする液体が漏れていた。

バーサーカーの身体から無数の漆黒の影が伸び、女の身体を捕らえる。

後は呆気のないものだった。

残ったのは無数に転がり、湯気を上げる肉片とむせかえるような濃い鉄の錆びた匂いだけだった。

「一人逃げちゃった……バーサーカー!!」

その声と共に僅かに人型を保っていたバーサーカーの身体が崩れ、  
ただの漆黒の流れとなり夜の空へと舞い上がった。

＋＋＋＋＋

（ツー！あれがサーヴァント……ふざけるな。あんなものが英霊だとでも言うのか。あれは断じて英霊などではない！！）

男は森の中を疾走していた。

サーヴァントが現れた上に仲間二人がやられたのだ。もはや、男に勝ち目など無く、こうして生きている事が奇跡だった。

「ハアハア??」

男はあの凄まじい狂気を何とか耐え抜いた。それは彼がこの仕事を三人の中でも一番長く続けてきた結果であろう。

（あんなものは英霊ではない。あれは??）

??悪霊だ。

もう少しで森の出口という所で、男の視界は黒く塗り潰された。  
そして??。

＋＋＋＋＋

森に今日最後であろう絶叫が響く中でイリヤスフィールは欠伸をす

る。

それと同時に蘇るほんの数日前までの常冬の大地での記憶。

アハト翁が用意した聖遺物を黙ってはね除け、かつて一人の青年が遺した物を触媒に召喚したバーサーカーのサーヴァント。

それに激怒したアハト翁だが、召喚したサーヴァントを実際に目にした時の顔といったら。あの二百年生きた老人の驚愕、それから恐怖へと移っていった表情を思い出す度にイリヤスフィールは笑いを抑えられない。

召喚したバーサーカーのステータスは不明な点が多いがそれを差し引いても十分に満足できるものであった。

「キリツグ。あなたの遺した彼にはどんな痛みをもって死んでもらおうかしら」

軽い眠気に襲われながらもクスクスと笑い、城へと戻るイリヤスフィール。

その背後には漆黒の狂気がゆらゆらと何時までも漂っていた。

第五次聖杯戦争の開始まであと僅か。

とある月の綺麗な夜の血生臭い物語はこれにて終幕。



## 第二話

### 半月（後書き）

イリヤ……黒すぎるだろ。イリヤファンの皆様申し訳ないです。書いてたら、こうなってしまった……。

さて、バーサーカーはどんな感じですか？感想頂けると嬉しいです。ちなみに今、風邪を引いてしましまして布団の上で携帯で投稿します。見辛いと感じになった読者様、申し訳ないです。

宝具のアイデアもまだ当分は募集しますので、気軽に送ってきて下さい。

それにしても三人称視点難しいな……。

では次回も宜しく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8359y/>

---

これでも元セイバーでした.....

2011年11月29日14時51分発行